

## 言語から見た中国の文化と日本の文化

崔 春 基

### 目 次

- I. はじめに
- II. 「老师, 您回家吗?」と「先生, お帰りですか」
- III. 「我走了」と「行ってきます」
- IV. 「想去」と「行きたい」
- V. 「寄存」・「保管」と「預ける」・「預かる」
- VI. 「你穿裙子不好看」と「これはちょっと…」
- VII. 日本人の「横並び」は学べるものか
- VIII. おわりに

### I. はじめに

前回においては、中国人は二極性（離散性）の行動を取り、日本人は一極性（横並び）の行動を取るということを考察したが、それらの長所と短所については言及をせず、ただ単に、中国人はどうして二極性の行動を取り、日本人は一極性の行動を取るかという問題を中心に論を進めた。それと同時に、森三樹三郎氏の、「中国人の二辺倒、日本人の一边倒」にも触れ、中国人が「二辺倒」になり、日本人が「一边倒」になるという森三樹三郎氏の説については、つまり、『中国人は知識人であろうと、無知の百姓であろうと、長い歴史に渡って、頻繁に変わる支配者や支配原理に慣れて、一つの原理を絶対化しなくなったので、「二辺倒」になり、日本人は長い間孤島という島国に住んでいたため、まるで「別荘育ちのお坊ちゃん」、「苦勞知らずの箱

入り娘」のように、うぶで、純真で、箱を開けたとたんに、目に入ったものにすぐ惚れてしまい、それを絶対化してしまうので「一边倒」になったのだ』という説については、結論としては、中国人の特徴と、日本人の特徴を非常に正確に捉えていると思うが、それが成立する理由、つまり、中国人は、頻繁に変わる支配者とその支配の原理に慣れて「二辺倒」になり、日本人は、島国に住んでいたためいわゆる「別荘育ちのお坊ちゃん」、「苦勞知らずの箱入り娘」のようになって、いったん外界に触れると目に入ったものにすぐ惚れてしまい、それを絶対化してしまうので「一边倒」になったということについては、疑問を述べ、私見を述べた。

そこで、ここでは、中国人の二極性の行動、日本人の一極性の行動をも含めた、これまで多くの中国人と日本人が述べてきた多方面に渡る行動様式の違い（文化的違い）の他に、またどんなものがあるかを考察しながら、それらを集約しようような中国の文化と日本の文化の根底に有るようなものはないのかどうかを考察してみたいと思う。

### II. 「老师, 您回家吗?」と「先生, お帰りですか?」

中国における中国人の日本語学習者のことであるが、廊下で、鞆を持って研究室から出てくる先生に出会うと、よく「先生, 帰りますか?」という。学生の方は、挨拶の「老师, 您回家吗?」（先生, あなたは帰りますか?）を言うつもりで、「先生, 帰りますか?」と

言うが、これでも直訳の、「先生、あなたは帰りますか?」よりは増しである。直訳の

① 先生、あなたは帰りますか?

を言ってしまうと、これはもう明らかに中国語そのものであり、

② 先生、あなたは…

を見ても分かるように、先生を敵に回す言い方である。

さて、中国語においては、相手の名前を呼ぶとか、相手の現在行なっているある動作を見て、「あなたは…をしているのか」と聞くのが一種の挨拶である。一般的に、中国人同士の知り合いの間では、「你好」とか「你早」のような挨拶はしないのが普通である。従って、中国人にとっては、

③ 先生、帰りますか。

は、りっぱな挨拶である。

ところが、これを言われた先生が、もし、「プロレタリア文化大革命」という動乱の時に学生に吊し上げられたことのある先生であるか、学生に監禁されたことのある先生であれば、「今も先生を監視しているのか」と一喝されないともかぎらない。というのは、③の「帰る」という動詞には、強い主観的な意志が託されているからである。日本語であろうと、中国語であろうと、「かえる」、「いく」、「みる」、「かう」、「うる」、「たべる」、「のむ」、「する」、…等等の動詞は、強い意志が託されていて、「私はなにがなんでも帰る」とでも言う、もう傍の者は止めようもないぐらいの意志が強く表れてくる。

このような意志動詞の文の主語が「私はなにがなんでも帰る」のように、第一人称であれば、意志が託されているということはよく

分かるが、「あなたは帰りますか?」のように、文の主語が第二人称の場合は意志がどのように託されるのかが問題となってくる。ところが、

④ あなたもそんな所へ行っているのか。

をみると、「あなた」が、行っはいけない所へ行く気(意志)を起こして「行っているのか」というように聞き手の行なう動作に意志が現われ、話し手はその意志を起こしたことに對して非難をする形となって表れて来ることが分かる。つまり「動作主」がある「意志」を起こしたことに對して、話し手が非難をする形で表れる。

従って、③も、まだ帰る時間ではないのに帰る気(意志)を起こして帰ろうとするのかと、学生が先生を非難する意味にも取れる。そのため、学生に行動を監視されてきた先生なら、「君は今も、私を監視しているのか」と一喝する可能性もありうるわけであるが、もし、学生が③を言わずに次のように言ったらどうだろうか。

⑤ 先生、お帰りになりますか。

これなら日本人でも人によっては言えるような言い方であり、③よりは増しな気がするだろう。しかし、この⑤であっても原則的には中国語「老师、您回家吗?」の訳文であって、「帰る」に託されている「意志」はそのまま残っており、場合によっては③の場合と同じ結果を招くことも有りうるだろう。というのは、意味や意志性においては

お帰りになる = 帰る

であるからである。このように動詞文を使うと敬語であろうと、丁寧語であろうと同じ結果を招く恐れが有る。

ところが、日本語には中国語にはない一つの特異な言い方が有って③や⑤が招くような誤解を招かずに済むことができる。

その特異な言い方という言い方で③を表現すると次のようになる。

⑥ 先生、お帰りですか。

この⑥は、③とどこが違うかという点、「意志」が含まれていない点である。つまり、③は動詞述語文であるのに対して、⑥は意志が含まれない名詞述語文である。

このように日本人は自由自在に文から人に誤解されやすい要素、つまり、意志性を抜き取ってしまって、差し障りのない名詞文にしてしまうことができる。このようにして出来た⑥は日本語特有のもので、中国語にはないものである。仮に③から⑥になる過程を「～する」から「～です」になる過程であるとすると、中国語にはこのような「する」と「です」に当たるものがないので、中国語と日本語のこの違いは視覚的にも一目瞭然であると見ることが出来る。

この一目瞭然の中国語と日本語の違いを、もう少し意味の面から見てみよう。まず③であるが、このような文は、動詞に託されている意志性のせいで人を非難する意味合いにも成れる。従って、③のような文は人に不快感を与えることも有る。特に主語が第二人称の意志性の強い質問文は、人に不快感を与えやすい。そればかりか、主語が人間以外のものを表わす名詞からなる動詞文の場合でも、その動詞が意志の強いものであれば、人に不快感を与える場合が多い。例えば、「明日は労働する」(「明天劳动」の訳文)。中国では学生がよく働かされるので、この例文を聞くと余計不快感を感じる。特に、意志性の強い動詞で終わる下げ調の文(命令文)等は、よい人間関係を損ねるような不快感を与えることになる。そのような場合、日本人は、巧みに

「～する」を、「～です」に切り替えることによって、上述の不快感を取り除き、人間関係を良くして和を求めることが出来、中国人がこの上なく羨ましがれる横並びの境遇にまで到達することができる。

さて、名詞には主観性は託されても、意志は託されない。従って、「～です」にも当然主観性は託されるが、意志は託されないし、人間関係まで損ねるような表現にはならない。それどころか、日本人は「～する」型の表現を「～です」型の表現に切り替えることによって「意志」から来る色々な弊害を取り除き、人が和むような言い方をして、人との和を保つことができ、横並びの境遇にまで到達することができる。

勿論、横並びの境遇にまで到達するには、「～する」を「～です」に切り替えるだけの手段にたよるのではなく、『北星論集』第36号で述べた「日本語の一極性」や後に述べる日本語の色々な特徴や手段などによるものである。

これに対して中国語は、まず「～する」を「～です」に切り替える手段、つまり、任意の動詞文をそれに対応する名詞文に切り替えるような手段がなく、逆に日本語なら主語を使わない「～する」の文にいちいち主語を付けて表現するので、かえって意志性が強くなる。例えば、日本語なら、「明日上海に行ってきます」と言ってしまうと済むのを、中国語の場合は、わざわざ主語を付けて、「我明天去一趟上海(私は明日一回上海に行きます)」と言うのが普通である。

ただでも意志性の強い動詞文に、主語まで付けてしまうと意志が強くなるだけではなく、自己主張の意味合いが濃くなって来る。これは、「買いません」と「私は買いません」を比較してみてもそれはよく分かる。

このように、中国語は動詞述語の文、主語未省略の文が日本語よりはるかに多い。日本語だったら「～です」で済む文を、中国語に

おいてはほとんどの場合「～する」にしてしまうし、二人が面と向かって対談をする場合でも中国語は主語を省略せず、いちいち付けて表現する。例えば、「ちょっとトイレに行ってくる」と言う場合でも、中国語は必ず「我去一趟厕所」のように「我」を付けて表現する。

中国語は、如何に主語未省略の文が多いか、また如何に「～する」の文が多いかは、次の中国語と日本語の比較を見たらよく分かると思う。

- (中) 你回家吗?  
 (日) お帰りですか。  
 (中) 你买票了?  
 (日) 切符をお持ちですか。  
 (中) 我们明天劳动。  
 (日) 明日は労働です。  
 (中) 我现在去买东西。  
 (日) これから買い物です。  
 (中) 我用机器做的。  
 (日) 機械で作りました(主語だけ省略)  
 (中) 你每天坐电车回家吗?  
 (日) 毎日電車で帰りますか。  
 (中) 我们明天比赛。  
 (日) 試合は明日です。  
 (中) 今天你整理花坛吗?  
 (日) 今日は花壇の手入れですか。

このように中国語は日本語より「～する」の文が多く、主語のある文が多い。従って、このような言語を使う中国人は日本人より、自分の意志を強く表に出すことができ、自己を強く表に出すことが出来る。つまり、中国人は日本人より自己主張を強くするということが出来る。

これは、中国人と日本人の実際の行動を見てもよく分かる。例えば、近頃の中国の若者達は、「中国人は、一人になると龍になるが、二人以上になると熊になってしまう。これに対して、日本人は、一人になると熊になるが、

二人以上になると龍になってしまう」とよく言う。ここで言う「龍」とは、強くて「有能な者」を指し、「熊」とは、「無能な者」を指すが、これは一種の比喩で、中国人の場合は、一人になると自己の意志を強く主張して強くなるが、二人以上になると仲間割れをして弱くなってしまふ、ところが、日本人の場合は、一人になると自己主張をしないので弱くなるが、二人以上になると皆が仲間の間柄になって、とても強くなるという意味である。このように、中国人は二人以上になると、よく仲間割れするが、日本人は二人以上になると、よく仲間の間柄になる。これが、つまり、中国人と日本人の行動の違いの一種である。

さて、この違いが生ずる要因は色々あると思うが、言語の要因を無視することは出来ないだろう。中国語の場合、話し手が、まず第一人称の主語で、自己を強く表に出しておいて、今度は「～する」のような形で、話し手の意志を強く表示する。つまり、第一人称の主語で自己主張を強くする。二人以上の人皆このようにすると、仲間割れもしやすくなる。これに対して、日本語は、先ず第一人称の主語が中国語ほど文中に表れない、つまり、自己が隠れてしまう。それに「～です」のような形の文で相手を労る。二人以上の人皆このようにすると、仲間の間柄になり易くなる。

この意味では、中国語を使う中国人は、自己主張の国民であり、日本語を使う日本の国民は、他人思いの国民(或いは他人を気にする国民)ということが出来よう。

### Ⅲ. 「我走了」と「行ってきます」

「我走了(私は行きます)」は中国人が家を出る時の挨拶であり、「行ってきます」は日本人が家を出る時の挨拶である。これは両方とも「～する」型の表現であると見ることが出来るが、実は、両者は大きな二つの違いが有る。その一つは、「我走了」には「私」

という主語がついているのに、「行ってきます」の方は主語がついていないことである。これはⅡの方でも触れたことであるが、この違いは正に中国語と日本語の大きな違いともいうべき違いである。Ⅱの方で見た中国語と日本語の一つの違いに、中国語は主語のある文が多く、日本語には主語省略文が多いということであったが、これはその典型的な例であると見ることも出来る。このように主語があると、ないとでは、自己主張の度合いが大きく違ってくる。「我走了」の方は、他でもない「私」が行くぞという意味合いが濃く、強く自分が行くということを強調する。これに対して、「行ってきます」の方は、自分ということを押さえて、ただ「～する」ということだけを細細と言った感じがし、自己主張とは程遠いものである。

それから、もう一つの大きな違いというのは、一方はただどこかへ「行く」だけであるのに、他方は、どこかへ行って元の所へ戻ってくるという意味上の違いである。これをもう少し詳しく見ていくと、「我走了」の方は、他人を意識せずにただ自分の行動だけを強調しているのに対して、「行ってきます」の方は、他人を意識しながら、つまり、自分を含めた家族全体の集団を意識しながら、自分はその集団の一員で、今はどこかへ行くけれども後でまたここに戻ってくる、即ち、自分はいくまで家族という集団のもので、今はどこかへ行くけれども、いずれはこの集団に戻ってくることを約束するという意味合いが含まれていると見ることも出来る。

以上のことを言い換えると、「我走了」の方は、「私」を中心に、「私」が目下なにをするかを強く強調しているのに、「行ってきます」の方は、集団を思いやり（他人を思いやり）集団に戻ってきて、他人と一緒にすることを約束する。この意味では、「我走了」は自己主張の典型的な文であり、「行ってきます」は他人思いの典型的な文であるといえよ

う。

ところで、人間は言葉によって物を考え、考えによって行動をするので、言葉が違うということは、発想も違うということであり、発想が違うということは、行動にも違いが見られるということである。現に言葉の違いが国民や民族の間には行動にも違いが見られる。例えば、中国人は公の場所によく喧嘩をするが、日本人は公の場所ではあまり喧嘩をしない。公の場所で喧嘩をする、しないは、単純に言葉だけによるものではないが、言葉の原因を完全に排除することは出来ないだろう。

中国語の場合、強い意志動詞に主語まで付けて、例えば、「我不买你的东西了（私はあなたのものは買いません）」のように強く自己主張をすると、他人の意志を無視することにもなり、他人を非難することにもなりかねない。人間は、人に非難されると、反発したくなることがある。一方、反発された方は今度はやり返したくなる。この場合、もし中国語の話者が日本人のように「ごめんなさい」と一言謝れば、喧嘩にならずに済むが、自己主張が本能の中国人は、このような場合、なかなか謝らない、いや、謝るところか、かえってもっと強く自己主張をする。こうして争いが生まれ、喧嘩が始まる。現に中国人は、日本人より何倍もよく喧嘩をする。電車の中、バスの中、アパートの前、朝市、スーパー等、ありとあらゆる場所で喧嘩をする。人前でないと自己主張が出来ないのか、よく人前で喧嘩をする。

これに対して、日本語の方は、「～です」のような言い方を自由自在に使うことによって、人に不快感を与える意志性を抜き取って人が和むような言い方をすることができる。例え「～する」のような言い方をしても、日本語は、主語を抜き取ってしまうので、自己主張とは程遠い、差し障りのない言い方になったりする。また、「～する」のような言い方でも、「行ってきます」のようなものは、他

人思いの、他人と一緒にするという言い方になるので、そう簡単に他人と対立することはないが、更に、日本人は、中国人とは反対によく「ごめんなさい」と謝る。このように、日本人は種々雑多の手段を駆使して、他人とは仲間の間柄になってしまう。従って、喧嘩というものも起こりにくくなり、Ⅱで見てきた「中国語は、自己主張の言語であり、日本語は他人思いの言語である」ということが、「～する」の文においても成立することがよく分かる。

さて、日本人の「行ってくる」という言い方は、なにも家族だけに言うものではない。自分の所属している会社、団体などにもいう言い方であり、自分の知らない人と臨時に組んだ団体、極端な場合は、自分の知らないある人と二人きりでどこかへ行く途中、トイレなどに行く必要があると、「ちょっと～に行きます」と他人に融合するような言い方をする。これに対して、「我走了」というのは、全体、或いは集団から、自己中心の行動を取ることを宣言する表現と見ることが出来る。人間が長くこのような言語を使うと、他人思いの言葉を使う方は、心理的に他人や集団に融合されやすくなり、自己主張の言葉を使う方は、心理的に他人や集団に融合されにくくなるようになってくる。その結果として現れる現象をⅤの方で詳しく見ることにして、ここでは、まず、人間の内心や気持ちの表現においては、中国語と日本語とではどのように違ってくるのかを考察することにします。

#### Ⅳ. 「想去」と「行きたい」

この二つの文は、ともに話し手の「行きたい」という気持ちを、表現した文である。話し手が文字、又は、音声を媒介に、自分の気持ちを表現する前に、単に心の中で「行きたい」と思っているだけの段階では、話し手がなにを考えているのか他人は分からないわけであるから、この表現は、他人は知らない段

階と、話し手が何らかの形で他人が気づくようにしたので他人が知るようになった段階に分けることが出来る。つまり、話し手が心の中で、「行きたい」など思っているだけの段階と、「行きたい」ことを他人が気づいてしまった段階に分けることが出来る。この二つの段階の前者を仮に「深層段階」とし、後者を「表層段階」とすると、中国語は、深層段階であろうと、表層段階であろうと、皆「想去」と言うが、日本語の場合は、深層段階の気持ちは「行きたい」と言い、表層段階のことは「行きたがる」と言う。

このように人間の気持ちの表現を、深層段階と表層段階に分けた場合、中国語は、いずれの段階においても、「想去」で表現するのには、日本語は、深層段階と表層段階をそれぞれ「行きたい」、「行きたがる」というふうに変った言い方で表現される。

例えば、中国語の場合は、

我想去。(私が行きたい) (深層)

他也想去。(彼も行きたい) (表層)

日本語の場合は、

私が行きたい。(深層)

彼も行きたがる。(表層)

のように表現する。

このため一部の日本語学者は、「行きたい」の場合は主語が第一人称であるが、「行きたがる」の場合は主語が第一人称ではいけないと言っているが、これは必ずしもそうであるとは限らない。というのは、

⑦私がこんなに行きたがっているのに連れて行ってくれないの？

という文が成り立つからである。しかし、この文は、「私がこんなに行きたくて表現を(身支度などを)しているのに連れて行ってくれないの？」という意味であるから、表層段階における文であることには間違いはない。

さて、深層段階と表層段階において、気持ちを表現する文の形が変わらないのは中国語であり、違うのは日本語であるが、この相違

点が成り立つ範囲はどれぐらいかという点、「行く」、「帰る」、「食べる」のようなすべての意志動詞の範囲、「悲しい」、「寂しい」、「嬉しい」のようなすべての気持ちを表わす形容詞の範囲と、また、

○我要吃这个。

○他也要吃这个。

●私はこれを食べようと思う。

●彼もこれを食べたがる。

のようなものもあつたりして、その範囲は相当広い。

形容詞の場合の中国語と日本語の相違点の例は、次のようである。

○我高兴（私は嬉しい）。

○他也高兴（彼も嬉しい）。

●私は嬉しい。

●彼も嬉しいがる。

このように、中国語は形容詞の場合でも、深層段階の言い方と表層段階の言い方が変わらないのに、日本語の場合は、深層段階の言い方と表層段階の言い方が違う。

ところで、日本語の動詞の場合の、「行きたい」と「行きたがる」の違いを見てみると、両者は、品詞が違う。一方は形容詞性の品詞であるのに、他方は動詞そのものである。形容詞の場合の、「嬉しい」と「嬉しいがる」も、一方は形容詞であるのに、他方は動詞である。これは、つまり、日本人は、深層段階の気持ちと、表層段階の気持ちは、全く同じ物であるとは見ていないことを意味するようである。日本語には、「あいつは、心にもないことを言っている」という言葉が有るが、このように、日本人は、深層段階の気持ちと、表層段階の気持ちは、もう違うものであると見ているようである。そして、「あいつの動作はそうであっても（非であっても）、心の方は是であるのだ」と寛大の目で人を見ている。つまり、日本人は、人間は皆深層段階の気持ちと表層段階の動作は違うものであると見ていると同時に、重きを深層段階の気持ち（こ

ろ）におき、人間のところは皆いいものであると見るようである。

これに対して中国人は、深層段階の気持ちと、表層段階の気持ちの表現は全く一致しなければならないとみなす傾向が有る。そして、この両者の違うものが出れば、「他口是心非」（彼は言っていることと考えていることが違う）と非難をする。と同時に、重きを表層段階に置き、人のところを知りたいければ、行動（表層段階）を見れば分かると思いがちである。

さて、中国人は皆、人を疑ってかかる点で有名であるが、なにを疑うかという点、深層段階の気持ち（ころ）と、表層段階の気持ち（行動）が、一致するかどうかを疑う。中国人は人に会うと、たいてい長い時間を掛けて、この両者が一致するかどうかを見ているが、この両者が一致する者であると判断した場合に、はじめて、その人を信用することになる。

これに対して日本人は、はじめから人は、深層段階の気持ち（ころ）と、表層段階の気持ち（行動）とは、必ずしも一致するものではないと思うようである。だから、日本人は、「心にもないことを言うな」と言って人を寛大したり、人の本音と建前ははじめから違うものであると思ったり、人の酒の上での失言を、「あいつは酒を飲んだから」という理由で許してやったりする。このように、中国人なら絶対許してやらないものでも、日本人は、許してやったりする。

前述のように、中国人は酒の上の失言も絶対許してもらえないが、それは、中国人は深層段階の気持ち（ころ）と、表層段階の気持ち（行動）は、常に一致するものと見るからである。そのため中国人は、人の表層段階の行動をみて、深層段階の気持ち（ころ）を疑うのが普通であるが、それは、中国の歴史上の、秦の始皇帝が、知識人の表層段階の行動だけを見て、ころの中を疑って、「焚

書坑儒」をしてかして、大量の知識人を殺したこと、また、近年においては、日本に留学をしたということだけで、人を日本のスパイと疑ったこと、酒の上でちょっと江青の悪口を言ったということだけで、処刑をしたりしたこと等を見てもよく分かる。

これに比べて日本人は、深層段階の表現と、表層段階の表現が不一致のことから、逆探知、つまり、表層段階の行動から、深層段階のここを探る、猜疑心がそれほど強くはなく、表層段階がすぐ深層段階につながると思わないようである。

以上で分かることは、人の行動を見て、それは、その人の心の動きと一致するものであると思うのは中国人であり、人の行動を見て、それは、その人の心の動きと必ずしも一致するものではないと思うのは日本人であるということである。

## V. 「寄存」・「保管」と「預ける」・「預かる」

前節では、中国人は、人の行動を見て、それはその人の心の動きと一致するものであると思い、日本人は、人の行動を見て、それは、その人の心の動きと必ずしも一致するものではないと思うことを考察した。前節では、また、中国人は、酒の上での失言も、その人の心の動きがそうであるからそんな事を言っているのだと思い、日本人は、酒の上での失言は、寛大するというのも見てきたが、これは、つまり、中国人は、人を疑う傾向が強く、日本人は、あまり人を疑わないということにもつながるが、このことは、他の言語現象にも見られる現象である。そこで、ここでは、先ず中国語の「寄存」と「保管」という言葉から見ていくことにする。

さて、この二語は、それぞれ日本語の「預ける」と「預かる」に当たるが、日本語の「預ける」と「預かる」ほどの意味の広がりを持たないものである。例えば、金を預ける

場合の「預ける」と「預かる」に当たる中国語は、「存款」と「保管」になり、「下駄を預ける」という「預ける」に当たる中国語は、「委托」となり、結論を預けるという「預ける」に当たる中国語は、「保留」となるなど、中国語の「寄存」と「保管」は、日本語の「預ける」と「預かる」ほどの意味の広がりを持たないのである。

このように、この「預ける」・「預かる」という言葉においても、日本語の場合、「個」が全体に融合されていくという現象が見られる。したがって、「預ける」・「預かる」という行為においても、日本人は、「個」が全体に傾いていき、強い調和性が見られ、いわゆる横並びという現象が生まれる。これに対して、中国語は、「個」が全体から対立・分散し、従って、このような言葉を使う中国人の行動も、横並びとは程遠い物になってくる。

現に、日本人は、中国人の何倍も物を預けるのが好きで、お金の預金などは言うに及ばず、辞表というもので人に預け、果ては命まで人に預けられる物と思っている。このように日本人は「預ける行為」においても、簡単に「横並び」になる。これに対して、中国人は、特に田舎のものは、銀行が有っても、お金を簡単に預けるようなことはせず、実際、火事などで、家に隠して置いたお金を燃やしてしまうものもざらにいる。

このような違いが生ずる根本的な原因は、人を信用するかしないかによるものと思うが、前節で見たように、中国人は、人の行為と内心の心の動きは一致するものとみなすため、外観だけで人を推し量ったりするので、人間同士お互いにあまり信用をせず、したがって、「預ける」・「預かる」という行為も、日本人ほど調和の取れたものにはなりにくい。

これとは逆に、日本人は、人間の行為と内心の心の動きとは、必ずしも一致するものではないと見ることから、人を寛大するので、人間同士お互いの不信感が、中国人ほど強く



はなく、お互いに信用し合う傾向が生じて、「預ける」・「預かる」という行為も、横並びになるまでに至る。

人を信用する、しないは、前節で見たように、国民の言語現象と密接な関係が有るが、また、国民の「預ける」・「預かる」の行為の度合いによっても、人間同士互いの信用度が分かる。中国人と日本人とでは、どちらが盛んに「預ける」・「預かる」行為を行なっているかは、実はここに述べるまでもなく、自明のことであるが、ここでは少し詳しく見てみることにする。

中国人と日本人は、どちらがより「預ける」・「預かる」の行為を好むかについては、単純な量的な比較はあまり意味がない。というのは、日本は経済大国なので、預金の場合、金額的には中国をはるかに超えてしまうからである。そこで、ここでは、どちらがより「預ける」・「預かる」の行為を好むか、また、どちらの方が、その範囲が広いかを見てみることにする。

さて、中国は、田舎へ行くと、銀行が有ってもお金を銀行に預けずに、家の中のどこかに隠しておく人が多い。一方、日本は山奥に行っても郵便局が有って、殆どの人がそこに金を預ける。それから、中国は、庶民の暮らしなどを見ても、預かり業者が少なく、ほとんど自力更生で暮らしているし、プロパンガスなども、使用者が一家販売店まで行って、買ってこなければならない。それから、中国では、どんな企業であろうと、清掃等を他社に預けるようなことはまずないし、郵便局以外に宅急便などがあるということは、今のところでは想像もつかないことである。いや、今の中国では、国営の郵便局であっても、人に信用はされてはいない。他に郵便物を送る手段がないから、いやいやながら郵便局を使っているだけである。

一方、日本は、個人であろうと、企業であろうと、預かり業者がなければ1日たりとも

やっていけないだろう。それだけ日本人は、「預ける」・「預かる」のが好きであるが、日本の場合には、「預ける」・「預かる」例を一々挙げるより、他人を如何に信用しているかを挙げた方が手っ取り早いと思う。日本人は、国内では言うに及ばず、外国にまで行って人を信用しすぎて大損をする例が幾らでも有る。例えば、ハワイの海岸では、専ら日本人の財布盗みを職業としている者がいるらしいが、それだけ日本人は、人を信用して、持ち物を海岸においたまま海に入るからそんな業者が出現したりする。

中国の観光会社でも、ガイド達が如何にしたら、無防備な日本人（人を信用しすぎる日本人）の持ち物を守ってやれるかと、その対策を練るために頭を痛めているという話を聞いたことが有る。日本人の他人信用の文化は、日本において形成された文化であるが、その文化を日本人は外国に行く時もそのまま持っていくので、ハワイの海岸の事件が起きたり、外国の空港や駅の待合室などで、持ち物を置いてそのままトイレ等に行ったりするので、荷物や財布を盗まれたりする。

以上のように、日本人は、「預ける」・「預かる」のが好きであるが、それは、先にIVで見た言語現象から来る、人を信用する心が有って、はじめて成り立つものである。

これとは反対に、中国人はなかなか他人を信用しない。他人を信用する場合でも、信用するまでに相当の時間が掛かる。そこで、ここでは、中国人の他人不信の例をもう一つ見ることにする。中国が長い歴史に渡って、宦官制度を持続してきたことは、世に広く知れ渡っていることであるが、その宦官という者は、宮殿の中の去勢された男のことである。その宦官が中国の政治を混乱に陥るようになり、数々の悪事を働いたことも、誰も否定はできないだろう。その宦官達が中国の政治を乱す以前のことである。中国の皇帝が、宮中の男をどうしても信用することが出来なかったか

ら去勢をしたのである。去勢そのものは、男性の性を信用することが出来なかったからしたと思うが、そこに人間不信の欠けらもなかったとは誰が言えるだろうか。

以上、中国人の他人不信、日本人の他人信用というものを見てきたが、日本人は、人間を信じて、人に何もかも預けた挙げ句、人に裏切られると、收拾がつかないぐらいの結果になることが多い。このような場合には、一般的に中国人の方が日本人より強い。中国人は、始めから人を信じ切るわけではないが、人を信じて何かを預ける場合でも、何もかも預けるようなことはせず、ある程度の警戒は怠らない。そして人に裏切られても、その前に一定の心構えが有ったので、日本人ほど取り乱すようなことはせず、立ち直るのも日本人より早い方である。言わばこれは中国人特有の強さである。中国人はこの強さが有るので、世界中どこへ行っても、そこに根を下ろし、強く生きていくことが出来る。

## VI. 「你穿裙子不好看」と「これはちょっと…」

中国のデパートなどで、客が服を買うつもりで試着をしながら店員に、「これ似合うでしょうか」と聞くと、

⑦ 你穿裙子不好看。

(あなたはスカートを穿くと醜いです) という返事が返ってくる事が有る。この場合、もし日本人の店員だったら何というだろうか。少なくとも試着のスカートを指しながら、

⑧ これはちょっと…。

とか、勇気を出して思いきって詳しく言う場合でも、せいぜい「お客様にはスカートよりジーンズの方が似合うんじゃないでしょうか」とか、このぐらいの言い方しか出来ないのでは

はないだろうか。

とにかく、中国人のような、人を傷付ける言い方は避けるだろう。しかし、「你穿裙子不好看」と言う中国人は、これぐらいでは人を傷付けるとは思わないだろう。いや、むしろ率直にありのままに答えたと思うかもしれない。

このように、中国人は物をずばりとありのままに言うのだが、これでもまだ足りないということで、中国では、よく「说话应该直来直去」(ものを言う時には、婉曲にはではなく、ずばりと言わなければならない) という。つまり、中国では、ものを言う時には、単刀直入に言うことを良しとしている。

先の例は店員の例であったが、今度は客の例を一つ見てみよう。店員が、商品を指しながら、「这个怎么样?」(これなど如何ですか) というと、客は、

⑨ 这个不好，我不买这个，我买那个。

(これは良くないから、私はこれは買わない。私はあれを買う。) と言っているのが普通である。これも日本人だったら、

⑩ これはちょっと…。

と言うか、「これより、あれをちょっと見せてください」(中国では国営の商店などでは、客が直接商品に手を触れられないのでこのように言う可能性はある) と言うか、言い方は色々有るだろう。

以上のように、中国人は日本人がびっくりするほど、ものをずばりと言ってのけるが、これが、つまり、文化の違いから来るものである。文化が違くと、これほど物の言い方も違ってくる。

さて、まず、⑦と⑧はどのように違うかを見てみよう。先ず目に付くのは、⑦は完全な文であるのに、⑧は省略文であることである。

ここでいう完全な文というのは、主語、述語の要素が全部表れることを指し、省略文というのは述語が文中に表れないことを指すが、特に⑦は、述語の要素が二つも出て条件句をなすが、条件が主語、述語、目的語で揃ってしまっているのに、「醜い」という結果（述語）をくっつけてしまう。もうこれでは「あなたは醜い」というのと同じぐらいである。「あなたは醜い」と言われて喜ぶ人は、まずいないだろう。従って、⑦は人を傷付ける表現である。勿論、「不好看」が、中国語においては、「醜い」、「体裁が悪い」、「恰好悪い」などの意味になるので、其中最良の意味を取ってみても「あなたはスカートを着くと恰好悪い」となって、程度の差こそあれ、女性の客ということを考えると、やはり人を傷付ける言い方になる。これに対して⑧は、述語が先ずないことと、主語の「これは」はスカートを指す点が、⑦とは大違いである。従って、「恰好悪い」という述部を付けたとしても、「あなた」という人のこととは関係ないことになる。それから、「これはちょっと…」と言っただけでは、スカートが良い、悪い、スカートが客に似合う、似合わないなどに関する責任は一切聞き手のものになってしまう。というのは、話し手、つまり、店員が、日本語においては文中の一番大事な要素である述語を省略してしまったので、その文が完全な文として成立するには、聞き手、つまり、客がその大事な述語を補わなければならないからである。つまり、文⑧の意味が成立する、しないの責任は聞き手の方に回ってしまうからである。

ところが、日本語においては、聞き手にこのような責任が回る文、つまり、話し手が聞き手に文の完成権を委ねる文（省略文）が中国語の場合とは違うところがある。実は、中国語にも、文⑧に当たる文がないわけではない。

⑩ 这条裙子有点儿…。

これが⑧に当たる文である。これを日本語に直すと「このスカートはちょっと…」となる。人によっては、このような文が有ったら、これを使えばいいじゃないかと思うかも知れないが、⑩はスカートとスカートを比べる場合に使うものであって、その前のスカートがある人に似合うか似合わないかについて云々する場合は、自己主張を強くする中国人だから、「あなたにスカートは似合わない」という意味で、⑦をずばりと言ってしまうのである。

ところが、⑧の方は、スカートとスカートを比較する場合でも使われ、スカートがある人に似合うかどうかを云々するばあいにも使われる言葉である。だから、中国語の⑦を使うところに使ったわけである。したがって、日本語の⑧は、結局中国語の、⑦と⑩の両方を表わすことが出来る。つまり、一極化する。

また、日本語の「これは」は、「この車は」、「この本は」、「この鉛筆は」、「このパソコンは」、「この机は」、「このスープは」、「このパンは」等々のあらゆる実物や事柄を指すことが出来ると言える。

一方、中国語にも日本語の「これは」に当たるものが有って、「这是」という。ところが、これは日本語の、「これは」と少し訳が違う。例えば、日本語の「これは何ですか」と「これは～です」に当たる言い方の、つまり、「这是什么」と「这是～」の、「这是」は日本語と同じぐらいに何でも指すことが出来るが、いったん省略文になると、日本語の「これは」のようにはいかない。これについては⑧を例に見てみることにする。先ず日本語の場合、

⑧ = この車はちょっと…。

⑧ = この本はちょっと…。

⑧ = このスープはちょっと…。

⑧ = この件はちょっと…。

これを見ても分かるように、⑧の「これは」は、様々な事物を指すことが出来る。これに対して、中国語の場合は、理論的には、

这是=这台车是

这是=这本书是

这是=这碗汤是

这是=这件事是

のように、「这是」が、様々な事物を指してもいいのであるが、実際使う時は右側の、意味の具体的なものを使うのが普通である。つまり、「二極化」する。(福祉学部北星論集第36号の13pを参照されたい)。即ち、中国語は全体を代表する「这是」が、具体的な「这台车是」、「这本书是」、「这碗汤是」等に分かれていく。

これに対して日本語は、例えば、「このスープは辛い」と言いたい時も、「これは辛い」と言うのが普通である。つまり、「このスープは」、「この車は」、「この本は」などの個々が、「これは」と言う全体に融合されていく。

そして、このような言葉を長く使う日本人は、行動まで、個々の物が全体に融合されていって、横並びとなってくる(一極性の行動になってくる)。これに対して、中国人は、二極性の言語を常に使っているので、行動までが全体から個々に分かれて、二極性の行動になってしまう

さて、客の言い方⑨と⑩であるが、まず⑨の方を見てみると、文が三つから成っていて、いずれも主語と述語が有って、前の二つの文は自己主張の原因・理由とその結果の関係になっている。この⑨の全体を日本語に直訳すると、「これは良くないから、私はこれは買わない。私はあれを買う。」となるが、これがもし独り言であれば、単なる話し手の意志に留まるが、これを「良くないと言った商品」を差し出した、売り手に向かって言ったものだからたまらない。日本人から見たら、これは大変無礼な言い方であろう。

一方、⑩の方は、文の完成権を、店員にま

わしているの、意味の成立は店員次第になる。従って、意味は絶対「これは良くないから、私はこれは買わない。私はあれを買う。」というものにはならない。かといって、形の全く同じ⑧の意味になるかということでもない。

このように、⑩の意味は、形の同じ⑧とも違い、同じはずの⑨とも違うが、それはどうしてかということについては、次の二組に分けてみる事が出来る。まず、⑩と⑨の違いは中国の文化と日本の文化の違いから来るものであり、⑩と⑧の違いは日本の文化そのものから来るものであると見ることが出来る。そこで、ここでは先ずきに、⑩と⑧から日本の文化の一面を見ることにし、それから⑩と⑨の違いから、中国の文化と日本の文化の違いの一面を見ることにする。

さて、⑩と⑧は、日本語の現場ではいたるところで見られるごく普通の文で、同一の文である。ところが、⑧はスカートが客に似合うかどうかを云々する場面に使われ、⑩はある商品を買うかどうかを云々する場面に使われたものである。つまり、⑩と⑧は、一つの文が、二つの違う場面に使われたのでそれを区別するために、違った番号を打っただけのものである。

このように、ここでは、「これはちょっと…」という文が二つの意味に使われているが、実は、理論的には、この文は、無限の意味に使われると見ることが出来る。というのは、日本語の「これは」は、無限の物や事柄を指すことが出来るからである。

従って、「これはちょっと…」という文は、無限の「個」(個別の意味を表わす文)が一つに融合された文であるとする事が出来る。

ところが、日本人は、「個」の方をあまり言わずに、「これはちょっと…」で済ます場合が多い。それは、ここの⑧と⑩の例が裏付けている。

しかし、日本語においては、個を融合する

文はこれだけではない。「今日は暑い」も、「これはきれい」も、「今学期は勉強するぞ」も、「よーし作るぞ」等、無限とっていろいろ「個」を融合する文が多い。そして、日本人は、「今学期は一生懸命勉強するぞ」、「今学期は熱心に勉強するぞ」とはあまり言わずに、「今学期は勉強するぞ」で済ましてしまう。つまり、「個」「個」が、一つに融合されてしまう。

そして、日本人は長い間このような言葉を使っているうちに、知らず知らずのうちに、「個」「個」の動作、つまり「今学期は一生懸命勉強するぞ」、「今学期は熱心に勉強するぞ」などが、一つの動作「今学期は勉強するぞ」に融合されていって、何時の間にか一つの動作、つまり、横並びになってしまう。特に、日本語は、何かをしようと力む表現に、個々を融合する表現が多いようであり、日本人の行動も、何かをしようとがんばる時、横並びになることが多いようである。

以上見てきたように、個々の行動が、よく横並びになるのが日本の文化の一面である。また、前で見たとように「～する」のような言い方を、「～です」のような言い方に変えて優しく相手をいたわったり、ここで見た⑩のような言い方をして、文の完成権を相手に与えて相手をいたわるような、聞き手思いの言葉をよく使うのも日本の文化の一面である。

では、⑨と⑩はどうだろう。先ず⑩の方は、上述のように個々の語や動作を融合する表現で、省略文であるが、この文の完成権は店員に回っている。従って、⑨のような意志を丸出しにして自己を強く主張する文には成らない。かといって、⑨と全然つながりのない文でもない。というのは、⑨と⑩は共に「これなど如何ですか？」の答えであるからである。実際、⑩という融合体の中には、「これは良くない」、「これは良くないから私はこれは買わない」、「これは良くないから私はこれは買わない、私はあれを買う」等の文も包含され

ていると見ることが出来る。しかし、⑩を完成する人が日本人であれば、文化の違いで、⑨のような露骨に自己主張をするような言い方はしないだけである。従って、⑩は、⑨のような意味を持つ文も包含する融合文であると見ることが出来るが、完成権を持つ人が日本人であれば、文化の違いで、⑨のような意味の文は考慮外になるだけである。

一方、⑨の方は、先ず「これは如何ですか」という質問に対する、いささかのためらいもない単刀直入の答えである、「这个不好」（これは良くない）を先頭に、これを理由にした自己決定とも言うべき主語と述語からなる自己主張の「我不买这个」（私はこれは買わない）が続き、そして、最後にはもう一つの主語と述語が中心になる自己主張の「我买那个」（私はあれを買う）が続く文である。日本語のコミュニケーションにおいては、喧嘩でもしない限り、これほど人の提示するものをあからさまに否定して、自己主張を全面的に押し出す表現はあまりないだろう。

さて、この⑨は、前でも述べたように、意味的には⑩に包含されている一つの「個」と見なすことが出来る。ところが、中国語にも⑩に当たる「这是有点儿…」(これはちょっと…)があるので、⑨は、これの一つの「個」、つまり、「这是有点儿…」を具体化したものの一つであると見ることが出来る。従って、⑩は、「個」が融合された文（「個」が一極化した文）であり、⑨は、融合文から取り出した具体的な文（融合文が二極化した文）であると見ることが出来る。

このように、中国語は二極化するのが特徴的であり、日本語は一極化するのが特徴的である。これをもっと具体的に言うと、例えば、名詞句の場合、中国語は「この帽子は」、「この眼鏡は」等という場合でも、日本語は「これは」という一言で済ませられる。

また、これはいい例ではないが、人をのしる場合でも、日本語は、「ばか野郎」の一

言に一極化されるが、中国語の場合は、何十もの具体的な言葉に分かれ、中には、主語と述語からなる、あからさまな自己動作を表現する言葉で相手を侮辱するものもある。

以上のように、中国語は二極性になるのが特徴的である。このような言葉を長い間使うと、人間の行動までが二極性の行動になってしまう。こうして、中国人は、二極性の行動を取るのが、一つの文化的特徴となってしまったのである。

また、中国語は、⑦や⑨のように主語と述語を揃えて話し手がはっきりと自分の意志を表明し、自己主張をあからさまに表に出すが、これも中国の文化の一面である。

なお、この節に関する日本の文化については、⑩と⑧から見た日本の文化の一面の方で、二点にまとめたので、それを参照されたい。

## VII. 日本人の「横並び」は学べるものか

中国人は、日本人の「横並び」を「团队精神」と言うこともある。そして、多くの青年がそれを学びたがっている。中国人は、「爱国主义精神」、「为人民服务的精神」、「雷锋精神」等のような、「～精神」というものは、学ぶことの出来るものであると思うのが普通である。それから、中国人は、同一の学習対象であっても、例えば、「学习马克思主义」（マルクス主義を学ぶ）と言ったり、「学习马克思主义精神」（マルクス主義の精神を学ぶ）と言ったりするが、「～を学ぶ」と「～精神を学ぶ」は少し意味が違って、前者は「～その物を学ぶ」という意味に使われ、後者は、「～に関する主旨を学ぶ」、或いは「～の大体のところを学ぶ」という意味に使われている。従って、「学习日本人的团队精神」は、「日本人の横並びの主要な部分を学ぶ」或いは、「日本人の横並びの大体のところを学ぶ」のような意味に取れる。しかし、実際中国では「外国の～を学ぶ」というのは、外国の「～」を教条主義的に学ぶのではなく、融通の利く

学び方をするという意味に使われている。従って、「日本人の横並びの精神を学ぶ」というのは、日本人の横並びのうち、中国に合う部分、或いは、必要な部分を学べば良いということにもなり得る。

さて、日本人の「横並び」のうち中国に必要な部分とそうでない部分とはなんだろう。筆者は、日本人の横並びはそっくりそのまま中国に必要であると思っている。先ず第一、日本人の横並びは、全体的なものであって分けることの出来ないものである。無理に分ければ精神的な面と行動の面に分けられると思うが、精神的な面がないと行動が伴わないのでそれを分けることは出来ないと思う。従って、そっくりそのまま学ばなければならないと思う。

そこで、日本人の横並びは、学べられるものかどうか、つまり、マスターし得るものかどうか、一つの問題となってくる。ところが、日本人の横並びは、清の時代の中国の留学生が学ぼうとして果たせなかったものであるし、今の留学生も学んではいるが、なかなか自分の物にはならない。従って、日本人の横並びは、非常に学びにくいものであるという結論が出そうである。事実、異国の文化は、学び取れるものとそうでないものがあると筆者は思っているが、日本人の「横並び」はその後者に属するものであると思っている。勿論、日本で生まれて、日本で教育を受けて、日本人の家庭で育つ人は、話は別である。

しかし、日本人になりきって、一人や二人がそれを学び取ったとしても、中国には何の役にも立たないと思う。というのは、少数の人がそれを学び取ったとしても、それは少数の人の特有の物になって、他の中国人には伝えることが出来ないの、結局は集団行動にはなれず、日本人の「横並び」のような「中国人の横並び」にはならないからである。従って、日本人の「横並び」は、日本人特有の物で、外国人にはなかなか学び取ることの出来

ないものであると筆者は思う。

勿論、言うまでもなく、マスターすることは出来なくても、研究対象にすることは出来る。そこで、筆者も欲張って今研究をしているところである。

ところで、日本人の「横並び」というものは不思議なもので、日本人がそれを悪く言う度に、日本国全体が繁栄に向かう。近代史を見る限りでもそれは分かる。幕末においては、一方では「横並び」の悪口を言いながら、武家や侍達が「横並び」によって平和裏に転業をして、明治の繁栄を迎え、戦後も「横並び」の悪口を言いながら、「横並び」の力によって皆が一丸となつてがんばって、経済の高度成長という繁栄を迎えたのである。今度の不景気の現在も、日本人は「横並び」の悪口を言っているが、今度も結局は「横並び」の力によって新たな繁栄を迎えるのではないかと思われる。日本は歴史の節目毎に、優秀なリーダーが出現して、「横並び」の力によって困難を乗り越えるが、今度もいずれは優秀なリーダーが出現すると思う。いや、もうすでに出現しているかも知らない。

ところが、日本人はこんなにすばらしい「横並び」の発生の原因を、日本人の生活してきた自然環境に求めている。例えば、森三樹三郎氏は、「横並び」の発生の原因を、日本人が、「四方を荒海で囲まれた孤島に住んでいたためである」と、言っているが、もし、自然環境だけにその原因があるのなら、日本と同じ環境に置かれていた他の民族や、或いは、日本よりももっと外部との繋がりがなかった民族が、横並びにならなかった点をどのように解釈すべきかという問題が残る。

また、今日の日本は、交通の事情からいっても、国民の国を出入りしている事情からいっても、海の影響などは全くないのに、今の若い日本人の方がかえって「横並び」の傾向が強いのはどのように解釈すれば良いのかということも、考えなければならない。

ところで、日本人の「横並び」は、各界、各層、場合によっては全国民の範囲において見られる現象である。例えば、アメリカ占領軍が日本の本土に上陸する時、全日本の国民が、無抵抗の状態であったが、それも一つの全国的「横並び」の例であると見ることが出来る。

このようになる原因を、自然環境だけに求めると、以上のような不都合が生じる。

そこで筆者は、日本人の「横並び」は、自然環境の原因のほかに、日本人特有の考え方そのものにも原因があるのではないかと思い、前の五節に渡って、日本人特有の考え方の源泉である日本語を中国語と比較をしながら考察し、日本語による考え方に内包されると思われる行動様式の特徴をも、いくつか考察したわけであるが、多くの課題を残しながらも一応の初歩的な結論は得られたので、それを「おわりに」の方で簡単に述べることにして、この節を閉じる。

## VIII. おわりに

もし、民族の共通の価値観を反映した物、心両面にわたる活動様式、或いは、それによって創られた有形無形の物を文化としたら、言語は一番典型的な文化であると言うことが出来る。というのは、言語は民族の客体に対する見方（価値観）を反映した創作物であるからである。そして言語は民族の考え方を決定し、民族の行動を生み出す。従って、各民族の言語を比較すると、文化の違いが分かり、民族の心が分かる。そこで、本論では中国語と日本語を比較しながら、中国の文化と日本の文化の違いの一部を考察した。

さて、ただでも中国語には動詞文が多く、日本語には名詞文が多いのに、そこに更に人間の意識を加えて、「～する」の文を「～です」の文に変えて聞き手の気持ちを和むようにする。

これは正に言語の中の絶品とも言うべきも

のである。このような手段で日本人は他人をいたわるので、他人と横並びの「同盟」を結びやすい。一方中国語の方は、動詞文だけでは済まずに主語という主役をもう一つ増やすことによって(日本語は文の主役が述語のみ)、話し手の意志や主張を更に強く表現できる。つまり、個が強くなって「二極化」しやすい。

更に、日本語は、「行ってくる」のような表現で、他人と一緒になることを約束するので、話者は他人と集団になりやすい。他方、中国語は、話し手の当面行なう行動だけを念頭においた表現をするので、話者が他人と融合しにくい。

また、日本語は、人の心の動きと、それを表現した動作は必ずしも一致するものではないと見る表現をし、中国語は、人の心の動きと、それを表現した動作は一致するものと表現する。従って、日本語の話者は、人の動作を見てその人の内心世界を疑うようなことはあまりしないが、中国語の話者は、人の動作を見て、それをすぐその人の心に結びつけ、疑い深くなる。これが実際の行動の面に表れて、日本人は人を信用するが、中国人は簡単に人を信用するようなことはしない。

だいたい日本人は一極性の言葉をよく使うが、中国人は二極性の言葉をよく使う。例えば、日本人は「わあ、きれい」とは言うが、「わあ、大変きれい」とはあまり言わない、これとは反対に中国人は、「わあ、大変きれい」とはよく言うが、「わあ、きれい」とはあまり言わない。つまり、日本人が「これはちょっと…」と言う場合でも、中国人は「この本はちょっと…」等と言うのが普通である。このような言語活動を長く続けると、人間の考え方や行動が、一方は「一極性」、つまり「横並び」(一つにまとまること)になってくるのに、他方は「二極性」、つまり「個」「個」になってくる。

以上、考察の過程と関係のあった、日本人と中国人の特有の特徴と言われるものを、ざっ

と並べてみると、日本人は、他人をいたわる、他人に優しい、あまり個を表に出さない、他人を信用する、物を預けるのが好きである、自分の犯したミスを簡単に認める、ものを抽象的に表現する。これに対して中国人は、自分の意志を強く主張する、個を強く表に出す、他人をあまり信用しない、物を預けるのが好きでない、自分の犯したミスを容易に認めるようなことはしない、ものを具体的に表現する。これらの特徴を文化的な特徴であると見ることが出来るが、これらの特徴の必然の帰着点として、日本人は「横並び」になり、中国人は「二極性の行動」を取るのである。

因って、この「横並び」と、「二極性の行動」は、それぞれ、日本の文化と、中国の文化の根底にある物と筆者は思うが、その詳細な裏付けは今後の研究に委ねる。

#### [引用文献]

- 1 『日本のことばとところ』 山下秀雄 講談社 昭和54年
- 2 『中国文化と日本文化』 森三樹三郎 人文書院 1993年
- 3 『北星論集』 社会福祉学部 第36号 1999年3月
- 4 『日本人の生活空間』 梅棹忠夫(等) 朝日選書79